



平成24年11月5日

## 卓話 『日本の音楽と世界の音楽』

一中節 宗家

都 一中 様

私は日本の音楽文化の精緻な構築力と深い精神性を伝えたいと思っています。特に一中節はそれを備えています。紀貫之は一中節と深い縁があって、一中節の一番大切にしている辰巳の四季という曲は紀貫之の歌で始まります。彼の歌には歌徳神話伝説が生まれたくらい、歌、言霊に力がある。その曲の最後は「四海波風静かにて 治まる国こそ久しけれ」といい、これが一中節300年の伝統を繋ぐコンセプトです。一中節は元禄時代に僧侶によって始められました。これを聞く方、演奏する方に幸せが来るようにという願いです。

三味線は中国から伝わったという説が主流で、琉球を経由したという説もあります。日本に三味線が入った時に琵琶法師がまず手にしたので、琵琶の撥と同じような形のものを使って上から糸を引っ掛けて弾きます。撥が弦を離れるときの離し方で情緒を作る。軟らかい穏やかな場合はゆっくり離し、雲行きが怪しくて激しい雨が降って来たなんてときは瞬間的に弾きます。あと掬いといって後側から弾くこともあり、左手による弾きもあります。この弾きとか掬いとかを利用して、いろいろな状況を表していきます。

三味線はチューニング、調子を合わせることが大事です。種類は大きく3種類あり、本調子が一番基本になる調子。真ん中の二の糸を一音上げると二上がりで、ちょっと派手な感じ。一番細い三の糸を一音下げる三下がりには華やかな感じになります。



チューニングは英語で調和するとか気分とか機嫌という意味ですが、まさに自分の気分が音に出してしまう。だから私たちは朝起きるとまず三味線の調子を合わせます。三味線の調子は自然現象ですから三味線というツールを使って自然の摂理と自分の精神を一体化させるのが調子を合わせるという作業です。

日本の音楽と世界の音楽を繋ぐキーワードは音階です。ドレミファソラシドが近代ヨーロッパ音階で7音音階。日本の音楽は5音音階、ペントニックといって1オクターブの中に5つしか音がない。日本人の原初からあるもので、いわゆる民謡の音階です。それから日本には雅楽という音楽が入って来て新しい音階ができます。日本人というのは歴史的に常に外国人になりたがる民族なんだそうですね。雅楽が入った頃は隋とか唐の人になりたがって、聖武天皇なんてほとんど中国の皇帝だか何だかわからない恰好してる。そういう意味で少しオフィシャルな感じ。だから本音よりちょっと居住まいを正してものを言おうなんてときに使い、「君が代」はこの律音階で出来ています。平安時代の末期に後白河法皇が好んだ今様の音階はほとんどこれで歌われています。

三味線音楽に漫才があります。漫才は日本の古典芸能の原点と言われ、訪ねていったお屋敷のご主人の幸せを祈るんです。人の幸せを祈るって抽象的で難しいけど、漫才という歌を使って祈ろうということです。

皆さまの幸せをお祈りして今日の卓話を終わります。

